

本多教学の研究

—近代日蓮主義教学研究序説—

村 瀬 章 遠

一、序

近代日蓮主義の指導者本多日生師（以下「師」と称す）は、慶応三年（1867）三月十三日、播州姫路に生まれ、昭和六年（1931）三月十六日、六十五歳を以て自坊品川妙国寺に寂した。

さて、師は、顕本法華宗（日什門流）の僧であり、私見によれば、師の教学は、什門近世の学匠日受（1692—1776）の教学を祖述したものである。（一昨年の発表と重複するが）、ここに、師の教学的系譜を示せば、

什門日受の教学は、永昌院日鑑（1806—1869）によって祖述され、日鑑は兎玉日容（1830—1890）に教学を伝授、日容はさらに生師に教学を伝授した。換言すれば、師は、

兎玉日容に師事して教学を研鑽したのであるが、その教学は、日容、日鑑を超えて、什門教学の大成者日受の教学を祖述したものである。

二、近世日受教学

では先ず、師の学祖日受とは如何なる人であり、その教学は如何なるものであったであろうか。

日受は、合掌阿闍梨と称し、江戸の人、壮にして出家し下総宮谷檀林みやぎに学び、元文五年（1740）、同檀林第五十九世の化主となった。さらに、寛保二年（1742）、京都妙満寺第九十二世の法灯を継いだ。後、品川本光寺に閑居し、安永五年（1776）七月、八十五歳を以て寂した。

日受は、本迹自鏡編、如実事觀録等を著わして、ひたすら自門教学の確立に努めた。

もともと、什門の教学は、致劣両派に對しいわゆる折衷的立場にあったが、その為、かえって致劣両派から容れられず、諸門流より異端視される結果となった。ここにおいて、諸門流に對して什門の立場を明らかにし、近代什門教学の基盤を確立したのが、日受の教学であったのである。

その教学は、明和七年(1770)十一月、日受七十九歳著作の如実事観録の序に完成している。

日受は、派祖日什の開目鈔感得説に基づき、従来一般の観心本尊鈔中心説に対して、開目鈔基準説を確立し、これに依って応身為体の仏身論を説いたのである。この応身為体論は、従来の報中論三身説に対するもので、日受によって寿量顕本正在応身説が闡明されてより、什門の仏身観は師の説を継承して異論がない。什門教学の特色たる応身顕本論は、全く日受によって確立された。

即ち、事観録に「寿量の顕本は正しく応身に在り、當に知るべし、俱体俱用は、直ちに理性の三身を指すに非ず(中略)所謂俱体は即ち体用不二の俱体、俱用は即ち体用不二の俱用也乃至故に知んぬ、無始無終の仏界は、俱だ事理一体の応身の事物を用いて、以て仏界の体と為す。故に応身の外に仏界なし。而るに徳の辺に約して三身と名づくるのみなり。故に実に尅して体を弁ぜば、但だ一体の事物の応身なり。故に知んぬ又俱体俱用は、並に是れ事仏也」と、事理一体俱体俱用三身即一の応身をもって本仏の体と

なす。ゆえに応身の他に仏界なし、応身一仏の三徳に約して三身と名づく云々と応身為正の仏身論を説いたのである。しかして日受は、自鏡編に「我等修顕得体系する時は必ず釈尊同体の本覚となるべし。釈尊も又修顕得体系する時は必ず先仏同体の本覚となるべし、其の先仏も又復斯の如く、前に古仏相統して本と絶ゆること無し」と、古仏相統の無始事常住論をもって本仏の無始無終を説明し「始成釈尊の当体を以って無始以来の古仏」としているのである。

三、近代本多教学

では次に、生師の教学は如何なるものであろうか。

師の教学は、本仏論中心の教学で、その著法華経講義上巻題言に「仏教の興起は、吾人を救わんとする仏陀の慈悲より来れるもので、(中略)一代仏教は此の因人と、果仏の關係に就て深遠巧妙の議論を煥発したるものである。更にこの二法に教行理の三法を加うれば五個の問題となる。この五個の問題に就て、第一に講究すべきは仏身観である。(中略)更に今番出世の釈尊に約せる所論を、寿量品の教義に照らし、之を開顕して無始實在の本仏の上に説明

せば、一層明白である」と。と、仏身觀を基点となす仏教觀を論じ、ここに於て、無始實在の本仏「三輪の妙化」を説述している。即ち、「三輪と云うのは、仏の力用を輪宝に譬へたので、輪宝は邪を摧いて正を顯す力で、転輪聖王の正義の戦の前に走って行く所の輪宝のその力用の如くに、

仏の御意と御身と御口とのこの三つの力用を、身口意三輪と申すのである。」と、三輪について述べ、さらに、「一切の人間の力用でも、やはり、意と口と身に分けるのである。(中略)それ故に仏様の力用を云うにも、やはりその仏の意がどう働き、身はどう働き、口はどうはたらくと云う、この三つで考えるのである。何とも申し様の無い尊い意味にはたらいて、吾々を救って下される仏の力用を三輪の妙化というのである。」と、三輪の妙化について述べ、しかしして、これをまとめれば無始實在の本仏一つになるというのが、師の無始實在の本仏身口意三輪常住の妙化説である。このように師は、本仏の本体と力用の關係を、体用不二として身口意の三業に約し、法界全体を一大人格者であると説き、法界の衆生は、皆悉くこの本仏の常住不斷の

活動の中に、化育されると説くのである。ちなみに、この始め無き實在の本仏身口意三輪常住の妙化説は、什門教學史上、生師獨特の説述である。

なお、私見によって、日受教學と生師の教學を対照、比較すると、日受の応身顯本論は、相統によって本仏の無始無終を説くも、古仏には、それぞれ塵点の始めと化導の終りを認めており、故に本仏そのものの無始常住が確立されていないいきらいがある。ここが日受教學の欠点であるといえる。このように、日受の教學は、仏身の常住という頂点に向って教學を立てているのであるが、これに対して、仏身の常住を出発点とし、最初からいきなり本仏の無始實在を明かし、本仏の体用の上に、一切の教義を判断、解釈しているのが生師の教學であるといえる。しかし又、生師の教學にも欠点がないではない。この点については次の機会にゆずる。

次に、師が積極的に唱導した「日蓮主義」とはいかなる主義であろうか。それについて師は、日蓮主義精要の序に「日蓮主義は開顯主義なり、統一主義なり」と述べ、近代

宗教界に在って、諸宗教を開顕統一すべく、常に前述の本仏を光顕し、同本仏を統一的本仏として説いているのである。つまり、この一大本仏の体用中に諸宗教を統一し、帰結するというのが、師の日蓮主義観である。換言すれば、師の日蓮主義教学とは、絶対的統一神教学であるといえる。即ち「宇宙の絶対」に於て、その本体に帰れば一つであるが、はたらくに就て言えば、沢山にわかれて現れて来るのである。それは彼の天月と水月との譬のごとく、天月にかえれば一つである。水月の影を万水にやどす所から見れば千万無量である。体用の關係を本体と活動の關係に於て体用不二として、その天の月と、水に映る月の全体を併せて一個の大人格者として拜むことが出来るのである。この思想は汎神の真理にも合し、宗教の絶対唯一の情操にも適うこと故に、真理からも認められ、宗教の情操からも是認せらるるもので、世界の宗教は最後にこの統一神の思想に帰着しなければならぬものであると思う」と述べていることよって明らかであろう。そしてさらに、キリスト教についてふれ「唯一神教たる基督教は基礎に於て汎神の真理

から破られ、建設に於て統一神の思想から破られて、彼等は終に落城するものである」と、唯一神教たるキリスト教は、人間はみな神仏に成れるという汎神思想に破られ、最後に統一神の思想に破られると述べている。私見によれば、この宗教学的統一神思想が、師独自の教学的立場であるといえる。しかして、師一代の日蓮主義活動は、この統一神教学に立脚した開顕統一主義の発動にほかならない。

四、結

以上の論述を要するに、師は、近代宗教界に在って、特にキリスト教を無始実在の本仏に統融すべく、宗教学的立場から、宗教学的範疇を用い、宗教学的統一神思想を、自己の教学的基盤としてこれに立脚し、近世日受のいわゆる門流教学を継承、力説したといえよう。

紙数の關係上、「註」は省略させていただきます。

(名古屋大光寺副住職)